

# 女性 の 労 働

才 田 祐 子

## I はじめに

## II 鍋谷における女性の労働

## III 結論にかえて

### I は じ め に

鍋谷においては、世帯の外に、賃労働者として働きに出ている女性がほとんどである。以下では鍋谷における女性の労働がどのようなものであるか、について述べていく。そして、それを支えている背景を、事実面と心理的レベルから考えていくことは、鍋谷の女性の役割を考えることにつながるのではないだろうか。

### II 鍋谷における女性の労働

#### 1. 女性の賃労働就業状況

##### ① 概 要

鍋谷においては、ほとんどの成人女性は賃労働に従事している。(図-1参照)特に、31～50才の既婚<sup>1)</sup>賃労働就業者の存在が顕著である。又、それに比べると、30才以下の賃労働就業率が低いことも、留意すべき点である。

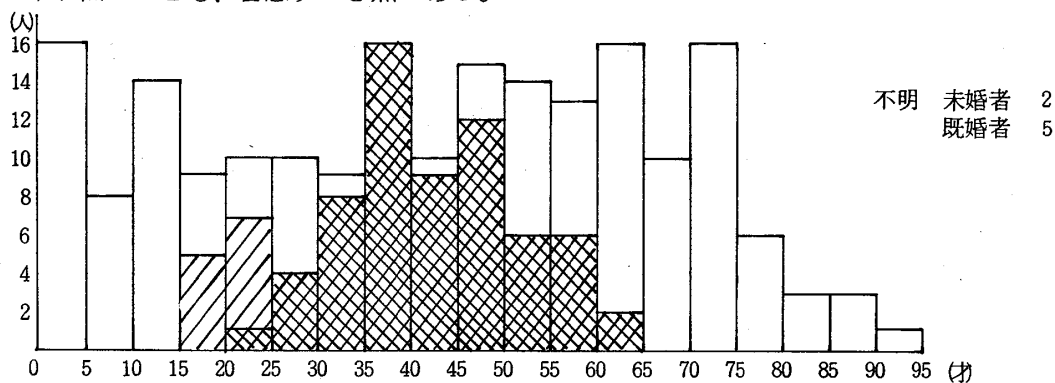


図-1 鍋谷における女性の賃労働就業状況

斜線 未婚労働者

格子 既婚賃労働者

昭和61年5月30日現在の人口に調査期間中得られた鍋谷在住の3名のインフォーマントの証言に基づき作成したもの

ここで、何才から賃労働に出始めるか、ということが問題になってこよう。図-1をみると、賃労働に出始めるのは、16～20才であることがわかる。より詳しくみると、その範囲の5名は

すべて18才以上である。よって、鍋谷において、女性が賃労働に出始める下限を18才と設定することが可能であろう。

ちなみに、上限は65才である。

## ② 就業内容と就業地

最も多くの女性賃労働者が従事しているのは、捻糸・練糸・おりもの、といった繊維関係の仕事で、その数は、全女性賃労働者75名中18名にものぼる。繊維関係に従事している女性はすべて既婚者であり、既婚賃労働者の28%を占めている。

繊維関係に従事している女性の年齢層は、30～65才である。その中でも、48才以上が18名中12名、約3分の2を占めている。

又、その就業先のほとんどは個人経営、もしくは小規模経営の工場・会社である。繊維関係の賃労働就業者の場合、鍋谷内の3軒（捻糸2軒、練糸1軒）の工場に、6名の既婚女性が勤

	年 齢 層	主 な 職 種	主 な 就 業 地
未 婚	18～25才 ( 11 名 )	病 院 関 係 金 融 関 係	金 沢 ・ 小 松
既 婚	24～30 ( 5 名 )	事 務	小 松
	31～50 ( 45 名 )	小 売 ・ サ ー ビ ス 業 繊 維 関 係	小 松 ・ 辰 口 町 内 ・ 鍋 谷
	51～65 ( 14 名 )	繊 維 関 係	辰 口 町 内 ・ 鍋 谷

表－1 女性賃労働者の主な職種と就業地

めている他は、宮竹や火釜といった辰口町内、或いは根上・寺井といった、比較的鍋谷近郊に勤めている事例が多い。

そのことは、繊維関係に従事している女性の年齢層が比較的高いことと関係がある、と思われる。ちなみに、鍋谷内の6名の繊維関係者は、全員47才以上である。

あと、就業内容で目立つものは、病院関係者である。看護婦・歯科技師・薬剤師・事務員を含めると、10名もの数が、病院関係者で占められている。その中に、未婚の女性が4人もいるのが目立つ。未婚賃労働就業者が11名であることを考えると、その中に占める病院関係者の割合は、非常に高い。

又、未婚女性の勤め先として、病院関係とともに目をひくのは、金融業である。銀行・郵便局・証券会社に勤めている6名のうち、4名が未婚女性であり、その4名は全員20才以下である。

病院関係、金融業といった未婚の女性が勤めている職場は、すべて鍋谷外で、概して金沢・小松等、比較的鍋谷から遠い都市地域に分布している。

一方、鍋谷内で賃労働に従事している女性は、全員が既婚者である<sup>1)</sup>。就業内容の内わけは、先述した繊維関係6名の他に、養豚工場3名、服部鉦山1名、その他4名<sup>2)</sup>の計14名で、全女性賃労働者の19%にしかすぎない。

鍋谷内で賃労働をしている女性の年齢は、30代3名、50代5名、60代1名となっている。図-1から、51才以上の賃労働就業者が14名と、比較的少ないことがわかるが、その中の5名、約3分の1が鍋谷内に勤めている。

51才以上の残りの女性達も、ほとんど下開発、湯ノ屋といった辰口町内に勤めている。

ここから、女性賃労働就業者のうち、比較的高齢の人達は鍋谷内もしくは辰口町内に勤める傾向が強く、一方、未婚の女性達は、鍋谷から遠く離れた都市へ賃労働にいつている、ということが言える。

では、その中間にあたる年齢層の既婚女性達は、どこでどのような仕事をしているのか。

概要で述べたように、就業率からこの年齢層の女性を、2つのカテゴリーに分けることができよう。30才以下のグループと、31～50才の極めて賃労働就業率の高いグループとにである。

まず、30才以下の既婚女性について言えば、その5名の就業地は、ほとんど小松であり、鍋谷内には1人もいない。そして、その職種は全員事務である。

他方、最も就業率の高い31～50才のグループ45名をみると、その人数の多さから、就業内容もバラエティに富んでいる。目立つものとして、既にあげた繊維関係の他、小売・サービス業がある。就業地は、30才以下の既婚女性と同じように小松が多い。又、鍋谷内や辰口町内でも多くのこの年齢層の女性が就業している。

### ③ まとめ

いままで、鍋谷の女性の賃労働就業状況をみてきたわけだが、就業率・就業内容・就業地等の観点から、4つのグループに分けることができよう。それを表-1にまとめてみた。

ここから年齢が高くなるにつれて、就業地が鍋谷に近づく傾向があることがわかる。又、若い人ほど高等学校卒業といった、高学歴を必要とする、専門職的色彩の濃い職業に従事している。

一般的な特徴としては、鍋谷のほとんどの女性が賃労働についていて、しかも、鍋谷内で働いている女性は全体の5分の1に満たず、鍋谷外へ働きに出るケースが多いことがあげられよう。

その中でも、特に既婚者の賃労働就業率の高さが際だっている。よって、以下では、既婚女性を中心にとりあげていくことにする。既婚女性が数の上で大多数をしめること、又、未婚女性が鍋谷外へ婚出してゆく傾向にある現状をふまえると、既婚女性についての考察のほうが「鍋谷における女性の労働」という本稿の主旨に適合しているのではないかと考えたのである。

## 2 それを支える背景としての事実

いままで見てきたように、鍋谷の既婚女性のほとんどは、賃労働に従事している。しかしながら、いわゆる「家事労働」も又、鍋谷では既婚女性の仕事とされている。食事の用意、部屋の整理、裁縫や衣服のつくろい、育児といった、家庭生活を維持していく為に必要な「家事」は、鍋谷においては、成人男性・子供・未婚の女性によって分担されず、既婚女性のみにかかされているのが現状である。

では、女性、特に「家事労働」を担っている既婚女性が、同時に鍋谷外へ賃金を求めて働きに出ている背景は、一体何であろうか。

鍋谷の家族の構造的特徴として、直系家族が核家族を上まわっている、ということがあげられる<sup>3)</sup>。そこで、三世代<sup>4)</sup>以上の同居、もっと直接的な言い方をすれば、世帯内に「家事」を分担してくれる「女手」<sup>5)</sup>が女性賃労働者の他にいることが、既婚女性が外に出られる背景となっているのではないか、という仮説を立てて話を展開していく。

そこで、自分以外の「女手」の存在が、既婚者が賃労働に就く際、どのように影響するか、を見る為に、表-2A・表-3Aを作成した。

前項で、賃労働者を4つのグループに分けたが、以下では、そのうち既婚者対象の3つの年齢群に対して、それぞれの家庭環境との関係をみていこう。(表-2B・表-3B参照)

年 令 計		家 族 タ イ プ				「女手」の有無	
		核 家 族	直 系 家 族	そ の 他	ひ と り 住	無	有
61～65	2	0	2	0	0	0	2
56～60	6	1	4	0	1	2	4
51～55	6	0	5	1	0	0	6
46～50	12	9	3	0	0	7	5
41～45	9	2	6	1	0	1	8
36～40	16	3	13	0	0	4	12
31～35	8	0	8	0	0	1	7
26～30	4	0	4	0	0	0	4
21～25	1	0	1	0	0	0	1
計	64	15	46	2	1	15	49

年 令	総 数	「女手」無	「女手」有
51～65	14	2	12
31～50	45	13	32
30才以下	5	0	5

表-2 B

表-2 A 既婚賃労働者の家庭環境

まず、比較的就業率の低い30才以下の既婚女性の場合、このカテゴリーの賃労働についているすべての女性は、自分の他に「女手」をもっていることがわかる。又、51才以上の賃労働就業者についても、その傾向が強い。この2つのグループについては、賃労働に就く場合、自分以外の「女手」の存在は、不可欠の要素である、と言えよう。

しかし、この両グループの場合、自分以外に「女手」があっても、賃労働に出ていない事例がかなりある。これはどう考えたらよいのか。

30才以下の既婚女性の賃労働就業率の低いことの原因として考えられるのは、0～3才の乳幼

年 令	計	家 族 タ イ プ				「女手」の有無	
		核 家 族	直系家族	そ の 他	ひとり 住	無	有
61～65	14	4	8	1	1	5	9
56～60	7	2	4	1	0	2	5
51～55	7	1	6	0	0	2	5
46～50	1	1	0	0	0	1	0
41～45	1	0	1	0	0	0	1
36～40	0	0	0	0	0	0	0
31～35	1	0	0	1	0	0	1
26～30	6	0	6	0	0	1	5
21～25	1	0	1	0	0	0	1
計	38	8	26	3	1	11	27

年 令	総 数	「女手」無	「女手」有
51～65	28	9	19
31～50	3	1	2
30才以下	7	1	6

表－3 B

表－3 A 既婚非賃労働者の家庭環境

児の存在である。賃労働についていない30才以下の既婚女性7名のうち、乳幼児がいないのは、わずか1名だけである。

一方、51才以上の既婚女性の場合、賃労働に出ない要因として、一般的にリタイアし始める年齢であることの他に、孫の世話や、自分達より上の年代の老人の介護等ということが考えられる。

今まで見てきた2つの比較的賃労働就業率の低い年齢層は、働きに出る場合には、必ず自分以外の「女手」をもつ傾向が強いのにに対し、30～50才の就業率の極めて高いグループは、自分以外に「女手」がなくても働きに出ていることがわかる。そこには、その年齢層の女性の子供は、ある程度の年齢に達し、一番手のかかる時期を過ぎている、ということが大きいと考えられる。

しかしながら、このグループにとっても、鍋谷では既婚女性が「家事」を全面的に担っているということを考えると、自分以外に「女手」がいるということは、賃労働に、鍋谷の外に出る際の、大きなプラス要因であることはまちがいない。

そのことをさらにはっきりと検証する為に、個人から世帯に目をうつしてみよう。全世帯90戸のうち、

「女手」が2人以上いる世帯…………… 47世帯

- ・ 1人が働きに出て、少なくとも1人が家にいる世帯…………… 37世帯<sup>6)</sup>
- ・ 2人全員が働きに出ている世帯…………… 4世帯
- ・ 1人も働きに出ていない世帯…………… 6世帯

「女手」が1人の世帯…………… 38世帯

- ・ 当人が働きに出ている世帯…………… 17世帯
- ・ 家にいる世帯…………… 21世帯

不明…………… 5世帯

と、なっている。

ここから、2人以上の「女手」がいる場合、少なくとも1人は世帯内にとどまり、他方は賃労働にいく傾向を指摘できる。「女手」が2人いて、全員が働きに出ている4世帯のうち、2世帯は片方の既婚女性の就業地が鍋谷内にある、ということも、その傾向を裏づけることとなるであろう。

又、「女手」が2人いるにもかかわらず、1人も働きにでていない6世帯の家庭環境をみると、そのうち、片方の「女手」が70才以上であるのが4世帯で、のこりの2世帯は、1才以下の乳児を抱えていることがわかった。つまり、「女手」が2人いても、既婚女性が賃労働に行きにくい状況が、それらの世帯にあるわけである。

さて、ここで1人が働きに出て、少なくとも1人が家にいる、という鍋谷では最も典型的な世帯に注目してみよう。（表－4参照）

	世帯数	賃労働者の世代	世帯数
「女手」が2人の世帯	34	第1世代	4
		第2世代	28
		その他	2
「女手」が3人の世帯	3	第1世代	1
		第2世代	2
	37		37

- ・ 「女手」が3人いる世帯の中で2人が働きにでていない世帯はない。
- ・ 「その他」とは、直系家族世帯以外の既婚賃労働者をさす。

表－4 複数の「女手」をもつ世帯の賃労働者の世代

ここから、下の世代の方が賃労働に従事している率が高いことがわかる。又、聞きとりからも、「年寄りと同居している為、小さな子がいても、世話をまかせて、外に働きに出ることができる。」（M男）という声も得られている。

既に述べたように、30才以下の既婚女性の就業率が比較的低いのは、乳幼児を抱えていることが要因である。しかし、鍋谷においては、乳幼児の存在は、女性が賃労働に就く際の決定的なダメージではなく、3世代同居によって、カバーされうる可能性をもつものであるらしい。（図－2参照）

鍋谷に乳幼児を預ってくれる、保育所等の施設がない<sup>7)</sup>事実も考えあわせると、そのめんどうを見うる存在としての、姑のもつ意味は大きい。そしてこの場合、姑にあたる年齢層が、51才以

上の既婚女性に相当しているわけである。

今まで、2人以上の「女手」がいる場合、下の世代が賃労働に従事し、上の世代が世帯内にとどまる傾向にある、ということを述べてきた。このことは、2人以上の「女手」が存在する要因、つまり3世代以上の同居の多さが、鍋谷の既婚女性の賃労働就業率の高さを支えている、という仮説を証明している、と言える。

次に、鍋谷の外へ通勤している女性が多いことに話をすすめる。その背景として考えられるのは、まず第1に交通の発達であろう。モータリゼーションが進み、鍋谷から、寺井・根上・加賀などはもちろん、金沢・小松までも通勤が可能であるが、女の人も自ら自動車を運転して勤め先に通う例もかなり多く見うけられた<sup>8)</sup>。

このことと、前項で述べた未婚および若い既婚女性が、鍋谷から遠い都市地域へ通勤している一方、年をとるにしたがって鍋谷へ近づく傾向にあることは関係がある、と思われる。(表-1参照)若い人は、自分で車を運転し、より有利な条件のところなら、金沢までも働きに出るが、年輩の人になると、やはり車を自ら運転する人の数は減り、通勤の負担の軽い所へ勤めに出るようになる。

鍋谷の外に出る、もう1つの背景として、鍋谷内に働く適当な場がないことも見逃せない。現在、鍋谷内で賃労働に就いている女性の勤め先は、夫の自営業を手伝っているものをのぞくと、2つの燃糸工場と服部鉦山、養豚場の4つに限られている。以前、鍋谷には3つの燃糸工場があったが、円高不況の為、現在、うち1つは閉鎖におこまれている<sup>9)</sup>。現在操業しているS工場も、最盛期14人もの人を使っていたそうだが、今では2人の従業員がいるのみである。又、服部鉦山も、近年多くの労働者をうけ入れる状況ではなく、唯1人だけが勤めているのが現状である。

このように、鍋谷内に多くの賃労働就業先がない為に、否が応でも外へ目を向けざるを得ないという状況もある。とりわけ、高等学校を卒業するのが当たり前となっている、鍋谷の教育状況を考えると、自分の高学歴を必要とするような職場が鍋谷内にないことは、未婚女性が金沢・小松に就職する理由となろう。

これまで、鍋谷の既婚女性のほとんどは賃労働に就いていて、それを可能にするのが、主に、3世代以上の同居であり、交通の発達であることについて考えてきたわけだが、ここで、逆に賃労働に従事していない、既婚女性の役割についても触れてみたい。

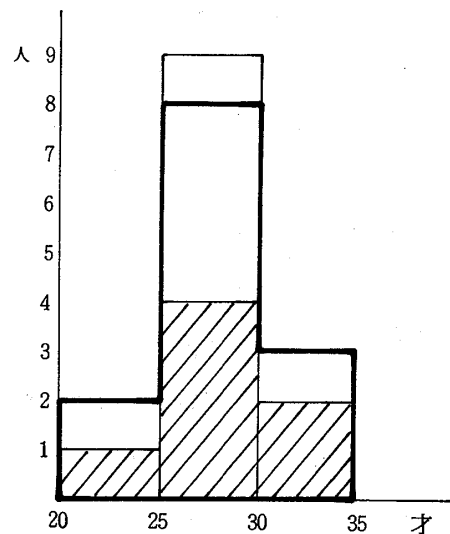


図-2 0～3才の子をもつ母親の賃労働就業状況

(太わく内は姑有  
斜線部は賃労働者)

非賃労働者の既婚女性は、世帯内にとどまって何をしているのだろうか。彼女達は、「家事労働」だけを行って、世帯の他の「女手」が働きにいけない背景を作っているのみなのか。

現在、鍋谷には兼業農家の数が著しく多い。そして、それらは分類上第2種兼業に属し、米を出荷するよりは、むしろ自給するのがせいぜい、といった規模のものである。畑においても、自家用程度のものしか作っていない<sup>10)</sup>。田植え、稲刈りといった、労働力が集中的に必要な時期は別として、日常の草とり等の農作業を行っているのは、既婚女性と、老人男性である<sup>11)</sup>。つまり家にいる非賃金労働者の既婚女性も、鍋谷という地域内で、生産活動を行っているのである。

ここで1つの既婚女性の典型的一生を考えることが可能である。20代で結婚し、子供を産む。そして、30代に子供の手が離れたら、世帯内に「女手」がいなくても、賃労働に従事し、50代でそろそろリタイアし始めるが、60代、あるいは70代までも、「家事」や農業には携っている、というモデルである。

鍋谷の女性は、賃労働という数字に表れるものい外でも、農業といったものを含めると、ほとんどの場合、一生を通じて、生産活動に関っている、と言えよう。

### 3 それを支える背景としての論理

鍋谷のほとんどの既婚女性が、「家事労働」以外の生産活動に携っている。それでは、その行動を支える論理は、一体何であろうか。

一般に考えられることは、賃労働等の生産活動から来る経済的プラスを得る、という論理であろう。「生活にお金がかかるので働く<sup>12)</sup>」という、女性賃労働者の声も、実際聞かれた。都会と全く変わらない消費生活を送っている鍋谷の人々にとって、生活にお金がかかる、というのは実感であろう。又、「生活水準をあげる為に勤めに出る<sup>13)</sup>」という証言もあった。

しかし、賃労働に出る際には、それにともなう出費、例えば車や衣料品にかかる費用等、があることも見逃せない。そのことを考えると、経済性という理由だけによる説明では、納得できかねる気がする。

又、ある20代の既婚女性は、平日の日中、鍋谷にいても話し相手がいないのでつまらないから、子供が大きくなったら、自分も働きに出るつもりだ、と語ってくれた。現在、鍋谷以外から婚入してくる既婚女性が多いことを考えあわせると、彼女達にとって、鍋谷の外へ働きに出ることは一種の息ぬきの作用をも果たしているのではないか、という仮説も成立するように思う。

しかしながら、これらの理由は、鍋谷の既婚女性の賃労働を支える論理と言える程、強いものではない。では、経済性以外に、何が鍋谷の女性を賃労働やその他の生産活動にかりたてているのか。

結論から言えば、鍋谷には「家にいるのはもったいない」といった、女性も生産活動に携って当たり前である、という意識が存在しているように見うけられた。世帯内にとどまって「家事」のみを行う既婚女性の姿よりも、「家事」とともに、何らかの生産活動に従事している姿の方が、



鍋谷においては一般的であるようだ<sup>14)</sup>。そして、その意識が、鍋谷の女性を生産活動、とりわけ現代では外での賃労働に従事するという行為の、心理的背景になっている、と思われる。

#### 4 その歴史的背景

女性も「家事」以外の生産活動に携わるのを当然とする意識が、どこから生じたのか、を考える際、鍋谷の昔をふり返ってみる必要があるのは言うまでもない。鍋谷の女性の、過去の労働の状況はどうであったのか。

まず、未婚女性であるが、彼女達が生産活動に従事していた、最も明らかな例として、明治期の紡績工場への勤務がある。

当時、尋常小学校を終えると、鍋谷の少女達の多くが紡績工場へ行った。現在、70代にあたる婦人は大聖寺の紡績工場へ、その上の世代は、大阪の尼ヶ崎の工場へ行ったそうである。Yさん(80才代)は、小学校6年生、12才のとき、尼ヶ崎の工場へ働きに行った<sup>15)</sup>。はじめは、日給16銭で、1ヶ月に2円もらい、3～4年たつと、月5円づつを親元へ送ったそうである。米が1升20銭の時であるから、5斗俵の米をかってありあまるお金であったと言う。そして、19才までそこで働き、その後鍋谷へもどって結婚した。

紡績工場に行く、といった明らかな例でないにしても、未婚の娘達は、親の労働を手伝うという形でも、生産活動に係っていた。そして、鍋谷内で結婚し、既婚女性となった彼女達は、今度は、夫とともに生産活動に携わるようになっていく。

それらの中でも、既婚女性が中心となって行われた、と言われている労働には、養蚕・ナギバタ・麻栽培・ワラ製品づくり・薪の運搬等がある。

養蚕は、明治のはじめから鍋谷でなされるようになり、大正以後、絶えたという。明治10年ごろは副業で、18戸の家が養蚕を営んでいた<sup>16)</sup>。Mさん(70代女性)のお姑さんも蚕をやっていたが、Mさんが嫁いで来て、1年程でやめてしまったそうである。

ナギバタとは、雑木や杉を伐採したあと、雑草や杉葉を乾かし、それに火を放って、その後種をまく、という、一種の焼畑である。アズキ・ソバ・ダイコン等が主に作られたが、虫がつきにくく、草とりの必要がない為、手入れが楽であった。その為か、主として、女の人の仕事であったという。1つの場所を利用するのはだいたい3年で、近所やシンセキを誘って、5～10人程度の人数で行うのが普通であったようだ。このナギバタは、昭和22～23年の、戦後の食料難の時代まで続いたそうである。

戦前は、麻も栽培されていた。麻からゴザをおるのは、ワラからワラジ・ゾウリ・雪ぐつ等をつくるのと同時に、冬の女の人の仕事であった。麻栽培は、麻から麻葉が作られる可能性があるというので、戦後すぐ、GHQによって禁止された。

寺井や佐野といった九谷焼の窯元へ薪を運ぶのも、女性と子供の仕事であった。ショイコにかついで、契約先の窯元のところへもっていくのだが、その途中、一休みする為に、岩崎という

ところに「やすんばい」という名の石があったという。ショイコからゴムのタイヤのついた車にかわり、次に馬車、自動車が登場するに至って、薪運びは女・子供の手から離れていった。

これら、自分達が比較的中心となった生産活動の他にも、既婚の女性達は、夫のパートナーとして、鍋谷の主な生業であった、農業・炭焼き・カベヒキ<sup>17)</sup>等に参加していた。特に炭焼きは、夫が炭を焼き、妻がそれを切って俵につめるというふうに、夫婦単位でなされる場合が多かった。

第2節で、現在は3世代以上の同居によって、子供を姑にあずけて、外に賃労働に出ている既婚女性が多い、と述べたが、昔は今よりはるかに生活条件が厳しかったことを考えると、食べていく為には、「女手」が2人いた場合、2人とも生産活動に携わらねばならなかったであろうことは、想像に難くない。

それでは、男の人が「家事」に協力していたのか、というとそうでもなかったらしい。「男の人は子供も抱かなかった。抱くと嫁に甘いとして、姑から非難された」(70代T女・N女)そうだ。乳幼児をみてくれる人が他にいない為、イズミというワラで編んだかごに入れて、それを田んぼの傍におき、農作業を行った、という話も聞いた。

では、これらの生産活動が、現代の賃労働に就く、という形に転換していったのは、何時のことであるのか。

「25年程前から女の人が勤めるようになった<sup>18)</sup>」、「女の人が外に働きに出るようになったのは、ここ15～20年のこと<sup>19)</sup>」という声が聞かれたとおり、転換期を昭和35～40年におけるのではないだろうか。そして、その転換の背景には、生業全体の賃労働への質的变化があるのは否めない。その流れの中で、既婚女性も賃労働に就くようになっていったのである。

その他にも、昭和35年からの、洗濯機等の家庭電化製品や、プロパンガス等の普及による従来の「家事労働」の省力化、又は、昭和34年の耕地整理や、農業の機械化により、田んぼに手がからなくなったことも、既婚女性が働きに出るようになった、見逃せない理由である。

又、現在衰退しつつある、鍋谷内の燃糸工場ができたのもこの頃であり、当時は今より多くの女性労働力を吸収していた、ということは既に述べたとおりである。

この燃糸工場へ勤める例のように、初期の既婚女性の賃労働は、鍋谷の内中心であった。そして、次第に交通の発達、教育水準の向上とともに、女の人が働きにゆく空間が拡大して、金沢・小松といった都市まで至るようになった、と考えられる。

鍋谷の女性には、生産活動に携わる空間が鍋谷内から外へ拡大し、賃労働という形態になっていったこと、そしてその目的が、昔は生活の為、食べる為であったのが、今では生活水準を上げる為になった、という変化がみられる。しかし、一方で「家事労働」を分担しつつ、同時に生産活動に従事していること、そしてそれが直系家族構造に支えられていることからとらえると、全く変化していない、とも言える。そこには、継続性が見い出せる気がする。そして、それが今日の鍋谷の既婚女性の賃労働就業率の高さを支えているのではないだろうか。

### Ⅲ 結論にかえて

以上、現在、鍋谷の既婚女性のほとんどが鍋谷外へ賃労働に出ていて、そしてそれを支える主なものとして、3世代以上の同居と、女も「家事労働」以外の生産活動に携って当たり前だという意識の、2つの要素を考えてきた。鍋谷の女性は、昔から現在に至るまで、「家事」とともに、それ以外の生産活動に従事するという役割を任ってきた、と言えよう。

今後の課題として考えていきたいことに、乳幼児を抱えて、しかも姑がいるという、同じ条件を持つ女性達の存在がある。(図-2参照)同じ2つの条件をもつ彼女達を、賃労働と非賃労働に分けているものは何であるのか。もう1つの課題として、他から婚入してくる嫁たちが、女も生産活動に携わるのを当然とする意識を、結婚後、どのように獲得していくか、という問題がある。

又、残念だったことは、賃労働就業状況を鍋谷在住の3人のインフォーマントの証言をもとに作成した為に、その職種や就業地の詳細な点がよくわからなかったことである。今後の反省点としたい。

注)

- 1) ここでは未亡人を含む。
- 2) 繊維関係以外の自営業を営む夫のもとで、賃労働者として働く既婚女性をさす。
- 3) 詳しくは、亀井論文参照。
- 4) 3世代とは直系家族を区分し、第1世代を祖父・祖母、第2世代を父・母、第3世代を子供に相当するものとした。(詳しくは、亀井論文参照)
- 5) ここでいう「女手」とは、女性の役割として期待されている「家事労働」を代行・分担もしくは扶助できる女性のことを対象としている為、以下、入院中の女性、未婚女性は、数に入れないこととする。
- 6) 3人「女手」のいる家は3軒で、すべて、ここに入る。
- 7) 保育園は、和気にある。
- 8) 「女の人も車をもって仕事に出るようになり、車も1軒に3台くらいある。」「女はだれでも運転する。それこそ1人1台、車をもっているくらいだ。」「(婦人会の役員)
- 9) 昭和43年、耕地整理後、余った労働力吸収の為、北日本産業株式会社を誘致し、最盛期には、40人を越える人が鍋谷から働きに行った。「女の人がほとんどであった。」「(T男)
- 10) 主に、サツマイモ・ジャガイモ・ナス・キュウリ・菜っぱなどを作っている。又、ここでは、野菜畑のことをシャインダという。
- 11) 詳しくは、藤崎論文参照。
- 12) 婦人会の役員の集まりにおける発言。
- 13) 地区の役員会における発言(Y男)
- 14) 「嫁さんも外に働きに出る。それが当たり前のような状況」(M男)
- 15) 以下は『辰口町史、第1巻(自然・民俗・言語編)』の記述による。
- 16) 『辰口町史、第5巻(集落編)』より
- 17) 陶石業のこと。
- 18) 婦人会の役員の集まりにおける発言
- 19) N女・50代